確かな学びを目指して

子どもと共に

日々変化する子どもたち、その子どもたちの可能性を拓く創造的な職業である教職について二十年が過ぎました。何年経験を重ねても課題が必ずあり、その課題を解決する…の繰り返しで、今も私は子どもたちと共に日々学び続けています。これまでの自分の経験を振り返り、学習指導について教師として私が大切にしていることを紹介したいと思います。

一つ目は、教材研究を楽しむ、授業を楽しむということです。子どもから「今日の授業、楽しかった」と言われるときは、私自身も授業を楽しんでいるときが多いような気がします。問題を見いだし、解決に向けて試行錯誤しながら悩み、解決にたどり着いたとき、そして新しい問題を見付けたとき…子どもと一緒に一時間の授業をわくわくしながら取り組んでいます。もちろん、授業を楽しむためには深い教材研究が必要です。事前の教材研究で私が意識をしているのは、子どもの目線でその授業を考えるということです。子どもの立場で教材を見て思考し、一人一人の子どもの姿をイメージしながら、子どもたちが教材をどのように理解、解釈するかを予想していきます。ところが、実際に授業を進めると、子どもたちの気付きは素晴らしく、事前に私が想像していたものをはるかに越えた発想をしたり、意見を発言したりします。「やっぱり子どもってすごい」「授業っておもしろい」と改めて感じます。

二つ目は、子どもと共に学び、共に授業をつくるということです。教師の思い通りにレールを引いてしまうのではなく、子どもたちが学ぶことを好きになるような授業をしたい、自分で自分の学びをつくっていけるような力を育てたいと思っています。そのためにも特

に、授業中の子どもの反応、つぶやき、意図しないような発言を私は大切にしています。教師になったばかりの頃は、指導案どおりに進まないと焦ってしまい、子どもの意見を取り上げず進めてしまうこともありました。しかし、ある日の算数の授業で、意図していなかった子どもの発言をきっかけに、学級全体が問題解決に向けたエネルギーで満ち、子どもが進んで活動する姿が見られました。一人の発言がクラス全員に深い学びをもたらしてくれたのです。教師だけではつくれない子どもと共につくる授業の醍醐味を知りました。子どもの発言が生まれた背景を探ったり、子どもに試行錯誤させたりすることが深い学びにつながるのではないかと思います。そして、子どもが進んで話したくなる、聞きたくなるという状況を作り、共に学び合うことで個の学びが更に深まり、「主体的・対話的で深い学び」になると考えています。それを目指して、私は参加する子ども全員でつくり上げる授業を実践しています。もちろん、子ども主体の授業と言っても子ども任せの授業ではなく、目標の達成のため、計画して板書したり発問したりするなど、教師の指導の工夫が必要です。また、授業中の子どもの表情、様子、つぶやきなど小さな反応を見逃さず、子どもの新たな気付きをクラスに広げ、成長につなげることができる感性を磨きたいと思います。子ども一人一人個性があります。個に応じた学びを引き出し、一人一人の力を高めることができるよう支援したいと思っています。

これまでを振り返ると様々な人に出会い、多くのことを教えていただきました。同じ学校で勤務した先生方、研修で共に学んだ先生方、子どもたち。人との出会いによって私自身成長できたと感じます。出会った全ての先生方、そして子どもたちに感謝しています。

宇都宮市立泉が丘小学校　　齋藤　亜沙美

多くの人に支えられて

現在、学力向上推進リーダーとして、教師の授業力向上を通して児童の学力向上を図る目的で市内四校を回り、各校の支援に当たっています。しかし、私の教育実習や大学時代を振り返ってみると、人前に立ったり、ピアノを前にしたりしただけで緊張が止まらないなど、一言で言うならば教師には向いていない自分の姿がありました。今のような自分の姿は全く想像すらできず、自分が教師になってやっていけるとは思えませんでした。少し回り道をして教師になった私ですが、これまで大事にしてきたことが、これからの若い先生方へ何かしらのメッセージとなれば幸いです。

私は、大学卒業後民間企業へ就職し、社会人としての生活をスタートさせました。会社では、信用・信頼を得ながら誠実に働くこと、丁寧な接遇、社業発展のため業務に対し責任を果たすことの大切さを学びました。また、お客様からいただくお金が、自分の（責任を果たし、成果を出した分の対価としての）給料となることを実感しながら、社会人としての心構えを身に付けていきました。今振り返ると、お客様をはじめ、仕事を通して接する様々な職種・年代の方々との関わりから、広い視野で物事を見聞きし、考え、行動することなど、仕事をする上で大切なことをたくさん学ぶことができたように思います。

教師になってからも、多くの先生方に育てていただきました。教師としての豊かな表情、子どもとの関わり方、授業への目の向け方や留意すべきこと、子どもの心をつかむ話術など、どの教科でも通じる大事なことを先輩教師から学びました。当然、それを知ったからといって、すぐに実践できるものではありませんでしたが、当時、若さだけは役に立ち、

できそうなものから挑戦しました。そこには共に学ぶ仲間もおり、先輩教師に教えを請うたり、技を真似たりしました。未熟ながらも定期的に研究授業を行い、多くの先輩教師から御指導をいただくことを通して、指導案や教材作成、板書計画、子どもの反応を見取りながらの授業展開など、実践を基にしたよりよい学びを得ることができました。そこから、日頃の教材研究の大切さを実感するようになりました。さらに、苦労した時こそ、その経験が後々の糧になるのだと思いました。また、先輩教師からは、常に子どものよりよい成長を願うぶれない指導があることにも気付かせていただきました。私は、授業では子どもの知的好奇心を捉え、伸ばしてやることが大切だと考えています。教師も学びを楽しむ心の余裕がないと、深いところまで思いが至りません。授業が上手な教師は、学級経営も上手で、子どもたちのよりよい変容をもたらしています。授業も学級経営もつながっています。子どもの心を受け止めながら、一人一人をよく見て、よりよい成長を促す先輩教師から、仕事だけでなく人として尊敬する面をいくつも学ばせていただきました。

何事も、経験したことは自分を育てる糧となります。子どもが経験を通して実感したことは、より深い理解につながることは周知の事実ですが、学習指導についても然りです。まずは、様々なことに臆せずチャレンジし、子どもの学習状況をしっかり見取りながら、よりよい指導となるよう改善して次に生かせばいいのです。小学校の学習指導は、子どもの学びに根を張る責任重大な仕事です。まだまだ力足らずの自分ですが、無限の可能性を秘めた子どもたちのよりよい成長を目指し、学校、保護者、地域の方々と力を合わせながら責任を果たせるよう、今後も日々精進していきたいと思っています。

下野市立古山小学校　　髙橋　真江

挑戦すること、真似ることから得られるもの

ずっと年下だと思っていた自分が、気が付けば先輩となり、教職十七年目を迎え、私が初任のころに児童だったような若い先生方と仕事をさせていただくようになりました。私自身は初任の頃、忙しい教育現場の現実と自分の不甲斐なさに落ち込む日々でした。運動も音楽も、専門性がない私は、何の指導にも自信がもてませんでした。だから、もしかしたらそんな思いをされている方もいるのではないか、とも思ってこの文章を書きます。

私が前向きになれたのは、ある研修で、面白い授業の実践を紹介してくれたベテランの先生から「私は自信がない。けれど、何か使えるものはないかな、と常に考えて物事を見て、やってみることは得意です」というような話をお聞きしたことがきっかけかもしれません。得意、不得意、向き、不向き…そんなことをいつも考えてしまい、手を出してこなかった自分がどれだけの時間を無駄にしてきたかと痛感しました。「これ使えそう」「やってみよう」と挑戦すること、真似することが、自分の糧になるのかもしれない、失敗してもいいからやってみようと強く思ったのです。そして、今の私は、「何か使えるものはないかな」と、授業や学級経営で使えるネタを探しています。見たもの聞いたもの、他の人の授業、講話、なんでもいいのです。少しでも新しいものをやってみたい、面白いものを試してみたい、と思うようになりました。うちの子たちは苦手だからな、ではなく、とにかくやってみる。そうすると思いがけない反応が見られることもあります。

最近、試してみたものを紹介します。まず、席の配置です。ある研修で、「日本の教育は百年前と変わっていない」という話を聞きました。確かにそうです。黒板を前に、みん

なが同じ向きで、先生を中心に授業をするというスタイル。その型を変えてみました。私がやってみたのは、U字型です。全ての教科で基本的にU字型に席を配置しました。もともと発言の少ない学級だったのですが、互いの顔が見えることにより、たくさんのよいつぶやきが聞かれるようになりました。さらには、「当事者意識をもたせる」実践です。そうすることが、自立・自律を育てることだと学びました。そのために、やってみたことが劇化と宿題廃止です。劇化は、道徳での役割演技、総合的な学習の時間で課題を把握するために状況を劇化する、国語で登場人物の心情に迫るために劇化するなどです。そうすることで、表面的な答えでなく、本当の気持ちに気付くことができ、さらには人前で表現することが苦手な児童が自分なりの言葉で話す姿も見られるようになったのです。そして、宿題廃止です。まずは、学級（六年）の子どもたちと話し合い、意見を聞きました。不安がる子もいましたが、みんなが納得する形を話し合い、実施に踏み切ることで、自ら課題を見付け学習に取り組む姿が見られるようになったと思います。

これらの実践を通して感じたのは、「担任が子どもたちのよい手本にならなければならないわけではない」ということです。目まぐるしく変化していくこれからの時代を、子どもたちにはたくましく生き抜いていってほしい、そのために自分はどんな関わりをするべきかを考え、実践することが大切なのだと思います。私が児童の自立・自律を目指し取り組んだ結果、最終的には担任は脇役になっていました。子どもたちは自分で考え、自分たちで話し合い、行動に移すからです。なりたい自分を明確にした子どもたちは、とても賢く強いと思います。私は、これからも子どもたちを信じ、挑戦を続けたいと思います。

那須町立高久小学校　小須賀　沙耶花

「学ぶ楽しさ」を大切に

家庭科の教員になりたいと思ったきっかけは、高校のときだった。高校の自由課題研究でパッチワークキルト作品を製作し、手芸の楽しさを知り、服飾や衣服製作を専門の大学で学んだ。個人的に和装が好きで、和服の平面構成を研究した。もちろん、服飾や和装など他業種にも憧れはあったが、それまで出会った先生方の魅力から、自分も生徒と「学ぶ楽しさ」を共有したい気持ちが勝り、教師の道を選んだ。

初任で勤務した学校、次に異動になった学校、そして今勤務している学校でも、英語科教師がたまたま不足していて、補充教員として、英語の授業を担当した。学校規模にもよるが、家庭科の授業時数は決して多くない。何かしら免外教科を担当することもある。複数の教科の学習指導をすることは教材研究などで大変な面もあるが、生徒の様々な姿を知ることができてよかったと今では感じる。教科の特質の違いを考えつつも、何よりも「授業を英語で楽しむ」ことをモットーにただただ夢中に授業を行っていた。今振り返ると、私の英語の授業で生徒に必要な力が身に付いたのかは疑問だ。自分が教師となった当時、家庭科の授業は現在と異なり、現在では履修しない被服製作などもまだあった。選択家庭の授業では、通常の授業では扱わない手芸の編み物や染め物、浴衣など和服や洋服の製作を扱い、作品作りを楽しんだ。調理の授業では、様々なお菓子を生徒と楽しみながら作った。あまり難しいことは考えず、ただモノづくりの楽しさを生徒と自由に純粋に味わうことだけを考えていただけで、いたってのんきな教師だった。

時は、平成から令和に移り変わり、学習指導要領も大きく変わった。大量生産、大量消

費の時代は終わり、持続可能な社会を構築していく中で、生徒が生きる未来は予測困難な時代に変わってきている。それに伴い、年々個々の生徒の生活経験が変化しており、指導方法や教育課程の変更、工夫改善も求められている。家庭科の学習の存在意義を考えたり、義務教育最終段階で育てなくてはならない資質・能力をどう育てるかを考えて授業づくりをしたりと、自分自身の意識もだいぶ変化した。限られた授業時数でどうしたら生徒が主体的に学べるか、どうしたらうまく生徒に伝わるか言葉や指導内容を精選したり、指導方法を工夫改善したりすることが日々の教材研究の中心となった。窮屈なレールを走らず、もっと自由に楽しめたらなと昔を懐古する気持ちもないわけではない。しかし、地域の方と連携して授業を行ったり、他教科、特別活動等と連携して学びを生かしたりして工夫して授業を進めてみると、日常とは異なる生徒の豊かな表情が見られたり、私だけでは伝えることができなかった専門的な知識や技能、感性など多様な学びを生徒が経験できたりと、新たに分かったことも多い。

以前、この『先輩教師からのメッセージ』で恩師が他に「真似ぶ」大切さを述べられていた。以来、仕事の合間に茶道の稽古を続けている。師から教えをいただき、教えに感謝することや教わる側の気持ちを体感することで、自分の教えを省みるなどよい学びの機会となっている。「知らなかったことを知る楽しさ」「できなかったことができるようになった喜び」は、自分を変えた。これは生徒においても同じだと思う。生徒の未来に生きる力を育むことのできるこの仕事の喜びに感謝し、可能な限りこれからも工夫を重ねて「学ぶ楽しさ」を伝えられるようしていきたい。

日光市立大沢中学校　旭山　晴美

音楽の授業を通して得たもの

音楽の授業は年間を通して、中学一年生が四十五時間、二～三年生が三十五時間で、歌唱・器楽・創作・鑑賞などの様々な領域を学習します。少ない時間の中で、目の前の生徒にいかに興味をもたせるか、より豊かな音楽を表現するためには何が必要か、常に最善の方法を考えて、生徒にアプローチしています。特に合唱指導では、クラスごとに課題を把握し、そのクラスに合ったやり方を模索しています。最初はうまくできなくても、一生懸命に取り組む姿や上達していく生徒の姿に、日々やりがいを感じています。

音楽の授業を通して実感していることは「音楽嫌いな生徒はいない」ということです。嫌いと感じている生徒は「音楽の授業が嫌い」なのかもしれません。それは個人の技能の差や今までの経験から嫌いになってしまうと考えられます。中学生は変声の時期を迎え、急に声が出しにくくなったり、音程が不安定になったりします。みんなと同じ声が出せなかったら、歌うことも楽しくないでしょう。そういう状態の生徒には個々にアドバイスをしています。「今の時期は音域が狭いから無理しないで」「周りの声をよく聴いて歌おう」など。ありきたりの言葉ですが、苦手な生徒でも向上心は必ずもっています。その気持ちをそがないようにすることこそ、音楽の授業嫌いをなくす一歩と考えています。教師の何気ない一言が生徒の心に響くと信じ、日々言葉を掛けています。

今まで学んだ知識や経験が教育現場で武器になることは間違いありません。自分にとって必要な情報を取り入れ、自分を常にアップデートすることが大切です。私は音楽教育の月刊誌を定期購読し、他県の先生の実践や情報を取り入れるようにしています。また、音

楽の研修の機会を見付け、積極的に参加しています。関東ブロック大会や県音楽部会の研究授業、宇大附属中の研究授業、東京の中学校の公開授業など、様々な研修会に参加しました。研修会は自分の向上心を高めるきっかけとなります。

また、我々の周りには各教科のスペシャリストがたくさんいます。他の先生の実践は、自分の教科指導や生徒指導に生きるはずです。前任校では、週に一回、研究授業がありました。教科によって様々な指導法や授業のスタイルがあり、大きな発見がありました。ＩＣＴ機器を駆使して、視覚的に分かりやすく示していた社会の授業、対話的な学習を取り入れた数学の授業など、自分の授業にも取り入れられる実践がたくさんありました。各教科の先生の取組を知ることは、自分の世界を広げることにつながると思います。教科に関係なく、先輩の授業を参観し、様々なことを吸収するとよいと思います。

今後の私の課題は「音楽科教育とＩＣＴ」です。音楽の授業において、ＩＣＴ機器を適切に使い、教育的効果を上げることです。実践例を参考に、何が効果的かを日々模索しています。勤務校では今年度から生徒に一台ずつタブレットが貸与されており、授業で使用することが増えています。音楽の授業においても、ＩＣＴ機器の使用は欠かせないものになると感じています。先日は表現領域の創作活動でアプリを使って旋律をつくる授業を実践しました。「簡単に音楽がつくれて楽しい」「またやってみたい」と生徒からも好評でした。また、デジタル教科書や学習支援のアプリを使った授業も取り入れています。今後も生徒のために何ができるかを日々模索していきたいと思います。

さくら市立氏家中学校　　西脇　紀子

授業を創る

私は外国語科の教員である。初任者研修で「英語を英語で教えるように」と指導された。当時は、「英語の授業改革」が急速に進められ、その一環として「英語を英語で教える」ことが求められ始めた頃であったと記憶している。大学卒業後、予備校教師をしていた私は文法を教え込む意識が強く、「文法用語も英語で教えるのか？」「学力が落ちたらどうしよう」と悩んだものだった。多くの先生方は「入試が変わらないのに授業を変えることはできない」と否定的であった。私も内心そう思っていたが、「やるしかない」という思いで少しずつ「授業改革」に取り組んだ。悩みながら授業を創っていく中で、自分が行っていることは間違っていないと思い始めた。生徒たちが生き生きしていたからである。同じ学校や地区内の先生方にも広めたいと思っていたが、「学力が下がるのではないか」という心配があり、多くの先生が踏み切れていなかった。結論から言うと、学力が下がることはなかった。むしろ、意欲が高まり、学力も向上したのではないかと思う。それが分かると、徐々にではあるが私の授業改革が理解され始めた。教員四年目の時、総合教育センターから「英語で英語を教える方法」の動画制作を依頼された。今考えると、何の知識もないまま作ったので恥ずかしいが、これにより以前の授業には戻れない覚悟ができた。

九年目にして初めての異動。この学校の二年生には、英語が堪能な生徒がいた。その生徒にとっても満足できる授業を創ろうと奮闘した。コミュニケーション活動を授業の軸にし、どの生徒にとっても分かりやすい授業をする努力をした。私の授業改革が更に加速する機会となった。そんなある日、私の教員人生を大きく変える出来事が起きた。文部科学

省と外務省が主催する「日本人若手英語教員米国派遣事業」に参加することになったのである。私はアメリカのカリフォルニア大学アーバイン校で半年間、第二言語として英語を学ぶ人たちにどのように英語を教えたらよいのかについて学んだ。宿題や発表の多さに圧倒されながらも、大変充実した日々を過ごすことができた。ホームステイをしながら過ごした半年間は決して忘れることはできない。帰国後の授業を意識して撮りためた写真は、今でも生きた教材として授業で使っている。講義や実習で学んだことをどのように授業に生かしているかは、ここでは紹介できないが、私に「こんな生徒を育てたい」と決意させた出来事について紹介したい。大学には様々な国から語学研修に来ている学生がいた。中東から来た学生の多くは、英語で自分の意見を積極的に発表していた。英語の正確さは決して高いとは言えなかったが、十分コミュニケーションが取れていた。一方、日本人の大学生は自分から意見を伝えようとすることが少なかった。また、英語の正確さはあっても流暢さが欠けていた。「英語を使って自分の意見を積極的に伝えられる生徒を育てなくては」と心に誓った。授業で英語を使うことに慣れさせなくてはならないと改めて思い、授業内容を大きく変えるきっかけとなった。

今でもあの時に心に誓ったことは忘れないようにしている。理想の生徒像が明確にあるため、一時間一時間の授業で何をするべきかがはっきりしている。活動の内容や順番も深く考えるようになった。どんな生徒を育てたいのかを考え、長期的・短期的な目標を立てることは重要である。「十年後」「一年後」「次回の授業後」の生徒の理想的な姿をイメージしながら今日も授業創りに励んでいる。

那須塩原市立黒磯中学校　　石井　宗宏

螺旋に連なる知の高みを目指して

たくさんの生徒たち、同僚、県内外の教育関係者の皆様と出会い、本当に多くのことを学ばせていただきました。数多の出会いから学んだことが螺旋状に連なり今の「私」を形作っているのだと思うと感謝の気持ちしかありません。いつまでたっても未熟な私ではありますが、これから、同僚の先生方や生徒たちから学んだ、学習指導をする際に常に心に留めている三つのことについて、お伝えしたいと思います。少しでも参考になることがあれば幸いです。

一つ目は、「必要とされる人材になる」ということです。私たちは決して教科書の中身を生徒に押し付けてはならず、学び考える楽しさを知る先達として、生徒たちに信頼され必要とされる存在であるべきだというものです。したがって、生徒の授業中の質問にすぐに答えられなくてもいいのです。決してごまかさず、しっかりと調べてから真摯に答えるべきなのです。事実、体裁を取り繕うことなく学ぶ姿勢や手段を示すことは、生徒の主体的な学びに繋がってきたように思います。

二つ目は、「本質を忘れない」ということです。もちろん、その日その時の授業の目標はありますが、目の前の生徒たちの十年後、あるいはもっと先の人生を念頭に置いた授業実践を大切にするということです。そう言う私も教員になってしばらくは、教え込み型のいわゆる教科書の内容を「分からせる」授業を行っていました。アンケート調査で「授業は分かりやすい」の項目の評価が高かったり、定期試験の平均点が高かったりしては安堵していました。その後、同僚の先生方や他県の先生方の多くの授業実践に触れる機会に恵

まれ、知的好奇心を喚起し進んで学習に向かう姿勢を養う授業や試験（定期・実力）の意義について思い至り、本質を根幹に据えた実践の大切さを実感しました。もっと知りたい、分からないからこそ分かりたい。そういう思いを抱かせる魅力的な授業が、自主学習を促し、さらに深い思考を導く高次の授業へと螺旋状に連なっていくと確信しています。

三つ目は、「授業は生徒と共に創る」ということです。授業内容は同じであっても生徒が違えば全く同じ授業展開になることはありません。一度教えた内容を他クラスや他学年で教える際は漫然とした指導になりがちですが、生徒が違えば疑問点も異なります。それに応じて発問も当然異なります。教室内の空気も変わり、指導目標に辿り着くプロセスも変わります。私たち教員は、観客を無視した独りよがりな演技によって舞台上で失笑をかう道化になってはいけないのだと思います。教室は、新たな気付きがあり感動があり歓びのある空間であるべきであり、それはその空間にいる皆で創り上げるべきものであるはずです。そのためには、入念な教材研究と明確な指導目標の設定、発見や思考の深まりに繋がる学問的な質、そして何よりも教師自身が楽しむ心が大切なのだと思います。

私は教師になれたことを本当に幸せに思います。そして生徒たちに心から感謝しています。生徒たちと共に学び、楽しい時間を過ごしてきたからです。もちろん、自尊心からなぜ分かってくれないのだと傲慢な授業をした時もありました。教え込むことばかり考えて、生徒の厳しい視線に孤独や不安を覚えた時もありました。そうした中で悩み導き出した答えが、生徒と共に学ぶことを楽しむというものでした。教壇を離れるその日まで螺旋に連なる知の高みを目指して生徒と共に学びを楽しんでいきたいと思います。

県立宇都宮女子高等学校　　黒川　治彦

全ての基本は授業から

自分の保健師としての専門的知識と地域活動の経験を、高校の福祉教育の現場で生かしたいと思い、教員採用試験にチャレンジしてから、早いもので十年以上の月日が経った。採用当時の私は、「現場での経験や地域の高齢者や福祉サービスの実際を、生徒に伝えたい」そのことを教えることだけに重きを置いていて、上から目線であったと反省している。初任者としての毎日も、日々の授業のために、教材研究に多くの時間を費やした。授業時間は一時限五十分と決まっているのに、生徒に伝えたい内容は山ほどあり、限られた時間の中でどう教えるか、それが自分の中の一番の課題であった。そして、授業中は時計で残り時間を見て、今日の予定している内容が、時間内に終わるかを気にしながらの展開で、どこか、自分中心の授業をしていた。

そんな時、教科の先輩教員に、こんなアドバイスをいただいた。「同じ教科は、もちろんだけど、他の教科の先生方の授業も見学してみたら…」と。それは、私に多くの気付きを与えてくれるきっかけとなった。同じ教科の先生方の授業は、指導内容のポイントに着目して授業を見学していたが、他教科の先生方の授業は、話し方や生徒との関わりに着目して授業を見学することができた。興味・関心を引くためには、どのような話題から授業に入ればよいのか、発問に対して生徒の反応がなかった場合の対応や授業での生徒の意見の取り上げ方等、他教科だったからこそ、気が付くことがたくさんあった。私は、社会人として専門知識や経験はあったものの、教える専門である教員として自分の視野の狭さを感じた。私が見ていたものは、時計やテキスト等の物であって、目の前の生徒ではなかっ

たのである。何と、もったいない時間を過ごしていたかと反省するとともに、気が付いてよかったと、ただただ感謝するしかなかった。それからというもの、私は、生徒の反応を大切にしながら授業を展開するように心掛けている。生徒の反応を見るということは、生徒の観察であり、単に、授業内容についての生徒の理解状況だけを意味するものではない。「いつになく反応がよいな」「何だか、疲れているな」等、生徒の授業中の様子だけでも、日によって変化がある。そこから、何かあったかな？という気付きにつながり、些細な変化から生徒とのコミュニケーションに発展し、信頼関係を深めるきっかけにもなる。授業という、毎日の何気ない場面からも、得られることが数多くある。

介護福祉士の国家試験を受験する専門学科は、学習指導の点からは、どうしても、国家試験合格のための知識や技術の定着という、結果に重きを置きがちになってしまう。しかし、本来の福祉教育は、生徒の人生をより豊かにするものであり、日常生活の中で、学習内容を実感できるようにしなければ、本当の学習価値は見いだせないと私は考えている。学習内容が定着しているか、また、単なる暗記にとどまっていないか、今日の授業での学びが、生徒の日常生活や将来に生かせるよう、学習内容と実社会での活用を考え、授業を展開している。長い教員人生の中では、「次の授業の機会」があるかもしれないが、生徒にとっては、その内容を学習する機会は、「今」が最後の学習機会かもしれない。教える内容は最新のものであり、解釈に誤りや偏りはないか等、教員として年数を重ねても、目の前の生徒の豊かな学びのために、責任をもって日々の授業を展開していきたいと思う。

県立真岡北陵高等学校　柳　路子

コラム

「授業」について考える

よい授業とは、どのような授業でしょうか。「分かりやすく教える授業」をイメージするかもしれません。しかし、この「分かりやすく教えようとする」ことが、時に子どもたちの考える機会を奪い、学ぼうとする意欲をそいでしまうことがあります。例えるなら、推理小説を読み味わう前に、犯人の名前を教えてしまうようなものです。

本冊子の内容からも、子どもたちに主体的に考えさせることの重要性が分かります。学習指導における教師の大切な役割は、子どもたちの興味・関心を引き出し、思考を促すことにより、深い学びを実現することです。子どもが「解きたい！」「考えたい！」と思うような課題との向き合わせ方、学習問題の設定、学習展開の工夫などが重要と言えるでしょう。

子どもたちとっては、当然「分かる」ことや「できる」ことも喜びの一つです。しかし、困難な課題にチャレンジし、仲間と共に試行錯誤しながら自分なりの答えを導き出したり、考え続けて新たな疑問や課題を発見したりすることには、もっと大きな喜びを感じるのではないでしょうか。

予測困難な時代と言われていますが、未知なる課題に前向きに挑戦し、失敗してもあきらめずよりよい答えを追い続ける。そのような意欲に燃える次世代の子どもたちを育てていきたいものですね。

関係資料のご案内

「『見方・考え方』を意識した授業づくり」
（小・中の各学校段階）
栃木県総合教育センター
2021 年３月

「問いは意図」
（高等学校段階）
栃木県総合教育センター
2021 年３月